

現代仏教学の課題

渡 辺 芳 遠

一、はじめに

歴史は発展して止まないものであり、その発展は弁証法的に進んで来たものと思う。仏教学もまた原始仏教→伝統的教
学（教相判釈）→近代仏教学と歩みを進め、今、それらを止揚
したものとしての「現代仏教学」が求められているのではな
いかと思う。

今大会の案内では、「伝統的教と近代仏教との間に存在
する諸問題」に大きな関心を抱いたが、私は最も興味を持つ
「現代の問題」を論じたい。伝統的教も近代仏教も勿論
大きな意義があり、それぞれ素晴らしい成果を挙げてはいるが、
現実の生きた仏教という観点から考えると、実に多くの批判
を耳にする。

仏教学にとつて宿命とも言える極めて困難な問題である信
仰と学問、大衆と個人、感情と理性等々の綜合を志向しなけ
ればならない。その綜合は永遠に不可能であるかも知れない

が、現時点での課題は伝統的教と近代仏教を止揚したもの
としての、まだその意味づけも実体も不明確な「現代仏教
学」の創造であり、私はそこに課せられている問題を考察し
てみたい。

「担板漢」のような偏見に陥るのを防ぐため、すべてをシス
テムとして考えた。

二、現代仏教学への期待

システムとして仏教を考える場合、抽象的な「学」その
ものを考えることは無理なので、仏教の担い手である学会
を考えた。つまり、「印度学仏教学会は、印度学仏教的情
報処理と印度学仏教学的物質・エネルギーの処理を通して、
自己保存や組織化を行なうシステムである」と考えた。

その情報処理、物質・エネルギーの処理を誤ると、学会は
存続しなくなり、仏教学は衰微する。情報処理とは、その時
代の人々が何を学会（仏教学）に期待しているのか、直接的に

は物質・エネルギー（資金・要員）の供給源である仏教教団、大学が何を期待しているのか、その情報を正確に把握して、それらの期待に応え得る有効な情報を研究の成果として提供することである。精神的物質的援助のみ他から受けて、研究者自身の期待だけに応えるような情報処理を、万が一、しているとすれば、仏教の前途は甚だ暗い。

現代全人類の共通の課題は、まず世界平和であり、環境、資源、エネルギー、食糧、人口等の諸問題の解決である。明治以後急激に移入された西欧文化は各方面に素晴らしい生活を我々にもたらしてくれたが、同時に一瞬にして全人類を破滅に導く核兵器が出現し、自己の限界を顧りみず自己主張のみ旺盛なトゲトゲしい風潮をも我々にもたらした。

そこで、もつと落ち着きを、安らぎを求める叫びが昨今多く聞かれ、人類の真の幸福をもたらす指導原理として仏教に期待するものが誠に大きい。実に現代ほど人間の運命が危機にさらされている時代はない。政治集団も仏教教団も大学も、それぞれ今、危機意識を強く抱かされている。

その危機を救う道として仏教が期待されているのである。

三、従来の仏教への批判

一つは現実との結びつきが薄い。大衆は高遠な学問を求めてはいない。非常に困難な厳しい思索を伴わなければ救わ

れないのであれば、大衆は逃げてしまふ。実はここにこそ仏教の本質があるのだが、大衆は煩惱に迷わされ、相変らず、病気が治ること、お金が得られること、出世をすること、他からチャホヤされることなどを求めている。そして、仏教の本質とは正反對の欲望の満足を目指す宗教（統計ではそれらの中に仏教系のものも含まれている）に大衆は走っている。

また、何でも実証されなければ満足しない西欧科学思想で教育され、しかもますます高学歴化する傾向にあつては、仏教に對しても、大衆は科学的な理論を求めぬ。仏教はあるがままの現実を正しく理解して、それに対処する方法を教えろというが、仏教の說明より、政治学、経済学、社会学、心理学等々の說明の方が現代人には納得がゆく。

もう一つの批判は、実践的な教えである仏教を理解している方々が、ほんとうにその教えのままを実践されているのであろうかという批判である。個人を責めるのではなく、教えそのものに無理があるのではないかという不安である。

職業としての学者や僧侶は口に説くことと自分自身の実践とが異なつていても致し方ないが、願わくは、「大変難しく厳しい道であるけれども、自分自身努力し、煩惱を少なくし、自己究明の結果、ほんとうの自己実現を得た。私自身、このように実践し、ほんとうに安らかな境地を得たから、みなさんも……」と説いて欲しい。

觀念としては仏教を理解しても、実践となると、唯み仏におすがりするという信仰で満足している大衆が多い。

単なる祖先崇拜、人の和、ひろい心、こだわらない心……を説くならば、他の倫理道德と変わらない。

四、課題の解決法

従来の仏教学への批判は、そのまま現代仏教学への期待であり、課題である。その存在価値を全く失なっているならば、何の批判も生じないはずであるから。

キリスト教が神の宗教といわれるのに対して、仏教は明らかに人間の宗教である。従つて、その課題の解決も絶対者としての神仏を考えず、あくまで人間自身を分析すればよいと思う。

人間もまた、システムとして考えれば、「高度の情報処理を行ないながら、自己の内部システムおよび外部システムを制御し計画し組織づけてゆく主体的システム」ということができ、常に社会的・客観的条件の下で生存するとともに、どのような集団の中においても各個の意識を持つという主体的・主観的な存在でもあると言える。

現代の時代が要求しているものは、理性を重んずる科学的認識と、ある面ではそれと矛盾する感性をも含む主体的実践である。その両者に応え得るものこそ、智慧を根本とする仏

教であり、慈悲を強調する仏教である。

そこで、現代仏教学に課せられた課題の解決法も、この両面を考えた。

まず第一に科学的認識を求めめる大衆に應えるため、出来る限り現代の科学的知見（自然、社会、人文諸科学の成果）を仏教学に導入することである。分別の次に無分別、分析の次に綜合を説くのはみ仏の教えである。一応の方法論として各専門に分かれて研究しているが、現実には複雑多岐なすべてのものが混在している。学校教育においても教科指導とともに生活指導が大切である。いかにある分野が秀れていても、全体としての効果は期待できない。誤りではないにしても、完全でない社会観人間観に立つ、現代の多くの人々は自己の領域に拘泥して綜合を嫌う傾向にある。

現代諸科学の中では、自然科学が最も進歩していると思う。しかし、その弊害も自覚され、その解決法を求めめるため、自然科学者で仏教思想を学ぶ者が近年特に多い。

ジャングルの中に点在する部落からの通信の如き研究も、勿論大切だが、同時に、そのジャングルを鳥瞰的巨視的に眺めて、暗い部分を明るくする、あるいは暗い部分を指摘することも必要と思う。多くの秀れた先輩の方々がある程度ジャングルの中にハイウェイ（概論、仏教史等）を通して、さらに他の諸科学をも包摂した、現代人に納得させ得る仏教

学の創造こそ急務と思う。

当然、独りよがり、学問的でない、専門の限界を理解しない等々の批判は蒙ると思うが、問題は方法論より問題意識（なぜそれを研究するのか）にあると思う。科学的批判に耐え得る仏教学創造のため、専門に拘泥せず、「学際的研究」（仏教学を人間苦惱解消学とか、社会不安減少学とかと考える）の観点に立たなければならぬと思う。

概して印度哲学という講座の国立大学と仏教学あるいは宗学という講座の私立大学との総合研究も大切である。

次に主体的実践であるが、理論は実践より生じる。ただ先輩の事実の調べて、それを大衆に示すだけでは知識の受け売りに過ぎない。他の諸科学の担当者はそれでよいかも知れないが、仏教学は実践が本質である。釈尊、宗祖に帰れとは、そのような主体的実践をされた方が釈尊であり、宗祖であるからである。

人間は社会的客観的条件の下におかれるので、人間を考える場合、その生年と環境に大きな関心を抱く。そこで「仏教学」を考える場合も現実の仏教学者が、いつ生まれて（これは戦争体験の有無など社会の影響を考えて）、どのような教育を受けたか（具体的には出身校など）、このようなことに対する分析反省も必要と思う。（他の学会員と本学会員との比較、出身校、年令別構成など調査したが割愛する）

現代仏教学の課題（渡辺）

特に仏教学の将来を考える場合、後継者の実態分析そして反省検討が必要である。

宗学の在り方については、多くの先輩諸先生が、護教的規範科学としての面と批判的経験科学としての面とを明確にして、ともに成り立たせようという方向を示唆されている。

五、おわりに

今大会の発表も専門的なものが、その八割九割を占め、仏教応用学的なもの、問題意識的なものの発表は少ない。勿論、従来の研究は重要であり、今後ますます深く究明してゆかなければならないことは当然である。

ただ碁で言えば、最後のツメの如き定石を覚えるだけでなく、最初に布石をする巨視的な見方も大切と思う。

無分別の総合的な立場に立つことも、絶対的な神仏に頼らず自己自身で努力することも、ともに仏典の教えるところである。自己の所属している宗派、大学、専門分野等のみ拘泥して、万が一にも、自分自身の出世や収入を第一に考えるならば、本質的な仏教は絵空事となつてしまう。

そのような煩惱を乗り越えて「現代仏教学の課題」解決の実践こそ、永遠に解決は不可能であろうが、そこへ向かつて精進する姿こそ、仏教自身の価値を大きく世に示すことになると思う。

（参考文献註省略）